

阿弥陀仏はどこにおられるのか。親鸞は、その『唯信鈔文意』に、「この如来、微塵世界にみちみちたまへり。すなわち、一切群生の心の心なり。」と明かされております。だから、阿弥陀仏とは、私の外にどこか遠いところにおられるのではなく、私自身の心、その生命（いのち）にすでに来りどいていてくださるのです。阿弥陀仏が、阿弥陀如来ともいわれるわけです。如来とは、来るといふことで、私の生命にすでに、来り宿っていただいているというわけです。だから、私たちが、その阿弥陀仏を信じているのは、私が、私の心の外の方向に阿弥陀仏を探しとめ

て、それに出会う、それを信じているではありません。そうではなくて、私自身の生命の中に、その存在の根底において、阿弥陀仏が、かたときも離れることなく到来していただき、私は、まさしく、昼も夜も、たえることなく阿弥陀仏といっしょに、その生命に包まれて生きていくことに「めざめる」のです。そういう確かな「めざめ」、思いあたることを信心というのです。だから、真宗における真実信心とは、法話を聞いて、聴聞をかさねることによって、その話のすじみちのよう



一枚の写真（信楽慧）  
今号から信楽さとしが写真を掲載させてもらいます。よろしくお願ひします。  
第一回目は京都御所にて撮影した小さな白い花です。道端に咲いていた可愛い花をメインに撮りました。  
普段から下を見て歩くのではなく、目を上げてまわりを配って歩くと、ふっと目に入ってくるものがあります。写真を撮るようになって、色々なものに目が行くようになりました。また次回もどこかで見つけた一枚をお届けします。

信心とは体験である  
信楽峻磨

安楽寺寺報

# 聞光

第72号  
降誕会号  
2014/8/1

発行所  
〒737-0054  
呉市上山田町2-28  
安楽寺  
0823-21-7561

はまさしく、自分の身をかけて体験することです。真実信心とは、体験です。わが身にかけて知られることで、そういう体験とならない信心は「うそ」です。しかれば、そういう真実信心はどうしたら生まれてくるのか。体験とは、自分自身が、それなりの目的をもって行動してこそ、成立するものです。

親鸞が、「ねてもさめてもへだてなく、南無阿弥陀仏をとなふべし」『正像末和讃』と教示される所です。先ずは称名念仏をもうすことです。日々不断に、念仏をもうしていたら、そういう「めざめ体験」が確かに確かに成立してくるのです。

呉空襲の日

今年7月1日69年目の呉空襲の日を迎えました。戦争を体験した安楽寺仏教婦人会員の西田千代子さんに、幼稚園へお越しいただき、その当時のお話をしてもらいました。

戦争の悲惨さや、それを肌で感じた空襲の恐ろしさ。その空襲から逃れるために命からがら、防空壕に逃げた時の様子。色々なお話をして下さいました。年長の子も達も、じつとそのお話に耳を傾けて聞いていました。



しかし今日本はそんな体験者の言葉には耳をかさず、戦争を知らない世代の指導者が集まって集団的自衛権の行使を認め、また再び戦争のできる国になろうとしています。だんだんと体験者がおられなくなり、その肌身で感じた体験を話せる人がいなくなり、戦争もバーチャル（空想）の世界になって来ました。

子ども達、否私たちにとっても、そのお話は映画やゲームの中の話のように感じる感覚があります。二度と同じ過ちを繰り返さないように、どこかで体験者の話しを私たちは聞き続けていかなくてはなりません。

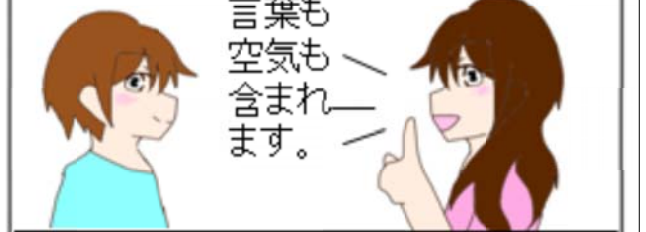
また来年もお話しいただきたいと思います。また、もしお話しいただける方がいらっしゃいましたら、ぜひ宜しくお願ひ致します。

編集後記  
今号から、長男が写真を掲載してくれることになりました。近頃写真を撮ることを趣味にして、色々な写真を見せてくれます。それなら、その中の一枚を、聞光に掲載してくれという事になり実現しました。  
私は写真は全くわかりませんが毎回の様な写真が出てくるか、楽しみです。妹はマンガ、兄は写真で協力してくれることになり、聞光紙面も賑やかになりました。皆様にはどうぞお育てくださいますよう、お願ひ申し上げます。

安楽寺マンガ通信  
その25 信楽めくひ作



しかしメディアとは「媒体」とも訳され、情報の記録だけでなく、情報を伝達するための媒体の総称です。そこには





# 風の中の電話

信楽晃仁

先日、NHKの朝のテレビで「風の電話」という岩手県の大槌町に設置されている、電話ボックスの報道をしていました。この電話ボックスは、ガーデンデザイナーの佐々木格（いたる）さんが、自宅の庭の一角に被災者の「心の復興のきっかけにしたい」と、立てられたものようです。

「風の電話」ボックスには、線がつながっていないダイヤル式の黒電話があります。だれでも自由に入力して話すことができ、電話の横には佐々木さんのこんなメッセージが添えられています。

「風の電話は心で話します。静かに目を閉じ、耳を澄ましてください。風の音が、又は浪の音が、あるいは小鳥のさえずりが聞こえたなら、あなたの想いを伝えて下さい。想いはきっとその人に届くでしょう」と。



電話の横にあるノートには、次のような文章がつづられています。

「平成二三年五月一三日。あの日から二か月たったけど、母さんどこにいるの。親孝行できずにごめんね。会いたいよ。絶対、見つけてお家に連れて来るからね」

「親父さん。貴方の白髪がとにかく懐かしいです。私はこれからの生活に全力を出して貴方の娘を守っていきます」

電話ボックスの中で大声で泣く人。一人静かにひっそり

電話の脇のノートには亡くなった人への思いが綴られています。

多くの人が訪れて、この電話で亡くなった人と心を通わせています。

この風の電話のエピソードを、童話作家のいもとようこさんが耳にして、それを一冊の絵本にしました。兄を失ったタヌキ、子や妻を亡くしたウサギやキツネが訪れて電話で話しかける物語になっています。私も早速購入し、今年の夕涼みの会（ひかり幼稚園の盆踊り）には子ども達に読みかきせをしてもらおうと思っています。

今年も八月に入りお盆を迎えます。お盆というのは、先立たれた人、亡くなられた人を偲ぶ日です。私達には今家族がいます。あるいはいま、おとうさん、おかあさん、おじいちゃん、おばあちゃん、おにいちゃん、おねえちゃん、妹、弟、家族にも色々名前がついています。その家族が亡くなっ



るとき、先祖と名を変えます。先祖は家族なんです。その家族を思う心。それが心配する心であったり、おもいやる心であったり、再会を期する心であったり、色々な、家族なればこそその心が生まれてくるのです。

お盆はお釈迦さまの十大弟子の一人、神通第一の目連尊者が、とてもやさしかったお母さんは亡くなって今どこへ行ったのだろうか、どうなったのだろうか、という母を慕う心がこの物語の発端になっており、そこからはこの行事は始まりました。その心は目連尊者の時代から言えば二五〇〇も前の人間も、今の人間も同じ思いで、先祖を見ていると言うことで、先祖のことを思う度、お盆になる度に不安になり心配になり、迎える度、送り火、キュウリやなすび、豪華なお供えが必要だといつて、先祖を供養しようと思えます。確かに暖かい心かも知れません。やさしい心かも知れませんが、先祖は供養しなければならぬものなのかどうか？。何千年たっても、相変わ

らず同じことを繰り返しています。さて、私たちはお釈迦さまの教えに従い、そしてそのお釈迦さまの教えの真意をお伝えくださった親鸞聖人の教えにあうことができている。その教えに会うものは「風の電話」は必要ないんです。もし何が起ころうとも、どんな別れをしようとも、心配する必要も、不安になる必要も供養しなければならぬこともありません。なぜなら、私たちは電話でつながらなくても、お念仏でつながっています。お念仏はほとけさまと、そして先祖と、私たちがつながりあって、いつてみれば携帯電話です。いつでもどこでも念仏申す度に、「私はここにいますよ。あなたも迷うことなく、ここに帰っておいで」との先祖の言葉を聞き、「私が帰る場所には先祖も故人もみんな帰っている。だから私もそこに帰り、そこで会えるんだ」としつかりと、いただくのです。

私たちがいつ何時、最愛の家族と別れなければならぬかも知れませんが。私たちの先祖もそんな悲しみを何度も体験してきました。しかし何

があるうとも、切つても切れない縁があること。それをお念仏は教えてくださいます。それがわかってい人は大丈夫です。日々お念仏申しつつ精一杯生きるだけなんです。でもわかっていない人は是非、お寺にお参りください。そこには「風の電話」に頼らなくてもすむ、すばらしい教えがあります。

## 暮らしの中の仏教語



「一言ご挨拶を

私たち日本人の心と生活の中には、深く仏教が染みこんでいます。私たちが何げなく使っている日常語の中にも、もともと仏教語だったり、仏教の思想と深く結びついている言葉が多く見受けられます。そのような言葉を取り上げて、少しでも仏教と生活が近づけばと思います。毎号一語ずつ取り上げて参ります。第一号は「あいさつ」です。是非、私たちの言葉の奥底に、どのような意味が流れているのか見て参りたいと思



## 安楽寺法要案内

九月	彼岸会	日時 講師 講題	9月13日(土) 朝席・昼席 安佐北 東善坊 龍花康丸師 信心とは
十月	顕真永代	日時 講師 講題	10月18日(土)朝席・昼席 豊島 登照寺 服部法樹師 本願とは
十一月	報恩講	日時 講師 講題	11月15日(土)・16日(日) 両日とも朝席・昼席 信楽峻磨前住職 往生～死んだらどうなるのか
十二月	成道会	日時 講師 講題	12月13日(土)朝席・昼席 阿賀 宝徳寺 平原弘史師 仏教とは

申し述べます」儀式などのときに、よく聞かれる言葉です。挨拶状などという手紙が来たりもします。ちよつとすごんで「挨拶してやるぞ」とか、冷たく「ご挨拶ですね」とか、挨拶は今では日常語になっています。

しかし、挨拶という言葉は、もともと仏教語なのです。挨拶は「押す」こと。挨拶は「せまる」という意味から、挨拶は、前にあるものを押しつけて進み出ることをいいます。禅家では、「一挨拶」といって、師匠

が門下の僧または修行僧同士が、言葉や動作で、その悟りの深淺を試すことがあります。これが挨拶でした。本来厳しい言葉なのですが、それが和らいで、現在のようになり、人と会ったときにする儀礼の交換、親愛の言葉のやりとりとなりました。これが人間関係を和やかにする上で何より大切な作法として残ったのです。今回このコーナーを始めるに当たり、まずは皆様に、つつしんでご挨拶申し上げます。

「風の電話」ボックスには、線がつながっていないダイヤル式の黒電話があります。だれでも自由に入力して話すことができ、電話の横には佐々木さんのこんなメッセージが添えられています。

「風の電話は心で話します。静かに目を閉じ、耳を澄ましてください。風の音が、又は浪の音が、あるいは小鳥のさえずりが聞こえたなら、あなたの想いを伝えて下さい。想いはきっとその人に届くでしょう」と。



「親父さん。貴方の白髪がとにかく懐かしいです。私はこれからの生活に全力を出して貴方の娘を守っていきます」

電話ボックスの中で大声で泣く人。一人静かにひっそり

今年も八月に入りお盆を迎えます。お盆というのは、先立たれた人、亡くなられた人を偲ぶ日です。私達には今家族がいます。あるいはいま、おとうさん、おかあさん、おじいちゃん、おばあちゃん、おにいちゃん、おねえちゃん、妹、弟、家族にも色々名前がついています。その家族が亡くなっ

たとき、先祖と名を変えます。先祖は家族なんです。その家族を思う心。それが心配する心であったり、おもいやる心であったり、再会を期する心であったり、色々な、家族なればこそその心が生まれてくるのです。

お盆はお釈迦さまの十大弟子の一人、神通第一の目連尊者が、とてもやさしかったお母さんは亡くなって今どこへ行ったのだろうか、どうなったのだろうか、という母を慕う心がこの物語の発端になっており、そこからはこの行事は始まりました。その心は目連尊者の時代から言えば二五〇〇も前の人間も、今の人間も同じ思いで、先祖を見ていると言うことで、先祖のことを思う度、お盆になる度に不安になり心配になり、迎える度、送り火、キュウリやなすび、豪華なお供えが必要だといつて、先祖を供養しようと思えます。確かに暖かい心かも知れません。やさしい心かも知れませんが、先祖は供養しなければならぬものなのかどうか？。何千年たっても、相変わ